



自然観察園情報

野外施設の情報は、ホームページで詳しく見られます

県立自然環境保全センター 生き物 検索



保全センターの野外施設には、身近な自然を観察する場の自然観察園(昭和57年オープン)と、樹木一つ一つをじっくり観察する場の樹木観察園とがあります。樹木観察園は約50年前(旧林業試験場時代)に整備されました。

野外施設では、それぞれの季節に、生き物同士の巧みなつながりや、植物や虫たちの興味深い生命活動など、大自然の不思議な現象にいろいろふれることができます。

このかわせみ通信では、野外施設でみられる自然のいとなみを「季節の様子」、「生き物たちの記録」、「最近の話題」、「こんな手入れをします・しました」などの項目で情報を掲載していきます。

<春から初夏の様子>

3月下旬から温かい日が増え、生き物たちが一斉に活動を始めた野外施設は、日に日に新緑が鮮やかになってきました。夏鳥のさえずりやシュレーゲルアオガエルの「コロコロコロ…」という貝殻をこすり合わせたような鳴き声が聞こえてきます。

5、6月には白が目立ちます。ヤマボウシやミズキなどの花に、ハンゲショウの葉のお化粧。濃い緑の中で花を目立たせようと工夫しています。



ミズキの花

<最近の話題>

お花の絨毯

地番杭Nのエリアでは毎年春にたくさんの草花が見られます。(Nエリアについては第1号で紹介しています。)今年も3月下旬からニリンソウやキクザキイチゲが咲き始め、ヤマエンゴサク、イチリンソウ、ヤマブキソウと次々と花の絨毯を作り出していました。

特に今年はヤマブキソウが例年より広範囲で見られました。



ヤマブキソウ

これ、な～んだ!?

4月25日、本館付近のモミジバフウの枝になぞの塊発見! 蜂の巣かと思ったら、たくさんのハチが集まっています。はっきりとしたしま模様からニホンミツバチとみられます。

これは「蜂球」と呼ばれるもので、春になり、新しい女王蜂に巣を譲った古い女王蜂が一部の働き蜂がもとの巣を離れて新しい場所に引っ越ししているときに見られるのだそうです。移動中は働き蜂が集まって女王蜂を守ります。

この蜂球は数時間でいなくなりました。新居にふさわしい場所は無事に見つかったのでしょうか。



蜂球

<生き物たちの記録> 1~3月の記録

冬の野鳥たち

冬の間、カメラマンに大人気だったルリビタキ。ルリ色のきれいなオスの完全成鳥から、やや瑠璃色の少ない成鳥、メスタイプ（ルリ色が少なく、オスカメスカがまだわからないもの）まで、4~5羽が見られました。

2月には50羽前後のマヒワの群れがハンノキの実を食べに度々飛来していました。しかし、同じアトリ科であるウソやベニマシコなどは、ほとんど見られませんでした。その他、数は少なかったですが、ミヤマホオジロがオス、メスともに見られ、今まであまり見られなかったミソサザイも確認されました。ミソサザイは小さく、沢沿いの藪にすぐ隠れてしまうのでじっくり観察するのはなかなか難しかったのですが、来園者の中にも気が付いた方がいたようです。

さらに、外来種では、ガビチョウが相変わらず多く、うるさいくらいに鳴いていますが、今まであまり見られなかったソウシチョウがこの冬は見られました。



ソウシチョウ



ミヤマホオジロ



ミソサザイ

カエル合戦

2月13日、谷戸から「コココココ…」ニワトリのような声が聞こえ、ヤマアカガエルのカエル合戦が見られました。カエル合戦とは冬眠から目覚めたカエルが池に集まり一斉に産卵する様子のことです。オスの鳴き声がにぎやかで、メスをめぐってカエル同士が入り乱れるので「カエル合戦」と呼ばれます。

ヤマアカガエルは1月下旬から2月の気温が低い時期に、園内で見られるカエルの中で一番早く出てきて産卵します。池の水が凍っても卵は平気。親カエルは温くなるまでまた冬眠します。

続いて3月になるとアズマヒキガエルが登場。今年は3月13日にアズマヒキガエルの卵塊を確認しましたが、盛大なカエル合戦は見られませんでした。ヤマアカガエルもアズマヒキガエルも例年にくらべカエル合戦が小規模で卵塊も少ないように感じました。

<こんな手入れをします>

この春は主に自然観察園外周の植生保護柵（防鹿柵）の補修と斜面の土留めを計画しています。

園内の植生をシカの食圧から守るために自然観察園を囲むように柵が設置されていますが、動物たちは少しでもすき間を見つけるとそこから侵入してしまいます。そのため、定期的にチェック、補修することが必要です。

土留めは斜面の土砂流出を防ぐために行います。土が流されると斜面の植生も失われてしまうため、土を受け留める土留め柵が必要になるのです。

また、夏に向けてヤマビル対策のための落ち葉掻きや草刈も行っていく予定です。

ミニ観察会（申込不要・参加費無料・雨天決行、当日午後1時に本館前集合）

ボランティアの解説員とともに野外施設の生き物を観察します。時間は約2時間です。

5月：1(日)・3(火・祝)・4(水・祝)・5(木・祝)・8(日)・15(日)・22(日)・29(日)

6月：5(日)・12(日)・19(日)・26(日)

7月：3(日)・10(日)・17(日)・18(月・祝)・24(日)・31(日)





自然環境保全センター（旧自然保護センター）の傷病鳥獣の救護業務は、人間の活動が原因で傷ついて保護された県内の野生動物（鳥類と哺乳類の一部）を必要に応じて治療やリハビリを行い、野生に戻す業務を中心に昭和53年から行っています。

この「かわせみ通信」では、県民の皆様により持ち込まれた救護動物の「救護原因」や「リハビリ状況」などの情報を掲載していきます。

<平成 28 年 1 月～3 月の受け入れ実績報告>

〔受付件数の多かった上位種〕

1 位	タヌキ	(14 件)
2 位	キジバト	(9 件)
3 位	ヒヨドリ	(5 件)
4 位	ツグミ	(3 件)

〔人間が関係する主な救護原因〕

<鳥 類>

ネコなどに襲われる	(10 件)
営巣木の伐採など	(4 件)
釣り糸や防鳥ネットに絡む	(3 件)
ガラス窓などへの衝突	(3 件)
ペンキや粘着剤に絡む	(2 件)

<哺乳類>

疥癬（かいせん）症	(8 件)
交通事故	(5 件)
罠にかかる	(1 件)

<冬のイベント実施報告>

普及啓発活動を行ってきましたー 共催：野生動物救護の会



救護原因の解説風景

平成 28 年 1 月 28 日（木）に七沢自然ふれあいセンターで厚木市立清水小学校 4 学年の皆様「野生動物といのち」についてお話ししてきました。身近にいる動物たちの紹介から、なぜケガをするのか、どうしたらケガをする動物が減るのかを考えてもらったあと、野生に帰すことができなくなった動物たちを間近に見てもらいました。

普段間近で見ることのないタヌキやフクロウなどを前にして、皆さんの目が輝いており、少しでも野生動物のことを考えてくれる機会を作ることが大事だと感じました。

第 2 回 野生動物特別一般公開 協力：野生動物救護の会/野生動物救護ボランティア

平成 28 年 3 月 13 日（日）に開催しました。春の暖かい陽気にも恵まれ、今回始めて開場待ちの行列もできて延べ 114 名の方にご来場いただきました。どうもありがとうございました。今回は、展示動物の紹介だけでなく、デジタルフォトフレームを使って夜間に行動するムササビの様子や放野風景、珍しい鳥類などの動画や写真もご覧いただきました。また、ボランティアさんが作製した羽根や翼の標本も展示し、普段見ることのできない動物の行動や羽根の形や色なども間近で観察していただきました。



野生動物の暮らしをイラストで紹介



ボランティアによる放野できない
チョウゲンボウの説明風景



羽根標本と翼標本の展示

< 救護実績報告 > 交通事故で運び込まれるホンダタヌキ（以下、タヌキ）達

毎年、交通事故で運び込まれる野生動物がいます。その中でも今回は、一番交通事故に遭いやすいタヌキについて、過去10年間（平成18年4月1日から平成27年3月31日時点まで）のタヌキの記録票を元にまとめてみました。

交通事故は、野生動物にも起こっています！

皆さんは、道路上にタヌキなどの野生動物が横たわっている姿を見たことがあるでしょうか。

ほとんどの場合は、その場で亡くなっていると思いますが、なんとか救護されても、脊髄損傷（せきずいそんしょう）や大量出血などの重篤な状態で運び込まれるため、この10年間では死亡率58%と高く、運良く命は助かったとしても、後遺症により2%は野生復帰が難しい状況です。

その反面、放野率は37%で、これは多くのボランティアの皆様の協力のもとで行った根気強い治療とリハビリによるところが大きいといえます。（図1）

タヌキにも秋の交通安全運動は必要だった！？

主に秋頃から春先にかけて救護される傾向があります。（図2）

このことは、タヌキが春から夏にかけて出産（約5頭）と子育てを行い、そして秋頃になると親と子が別々に行動し始める親離れの時期と重なるからです。この時、親離れをした若いタヌキ達は、新しいエサ場や新しい生活の場を求めて里山から市街地へ移動したりと、慣れない環境で新たな活動を始めます。

また、習性として夜間に活動的になり、驚くとうすぐまることもあるため、道路を横断する際に交通事故に遭いやすいのだと考えられます。

私達にできることは？

道路建設や里山開発など私達の暮らしが豊かになる一方で、野生動物の生息地が失われつつあります。その中でもタヌキは、私達の身近な野生動物であり、側溝などの人工物や残飯などを積極的に利用して巧みに生きています。車を運転する時は、人間だけでなく野生動物の飛び出しにも注意して下さい。そして、はやめに点灯し、スピードの出し過ぎにも気をつけましょう。

また、思わぬ餌づけにならないよう、ゴミの出し方にも気をつけましょう。

お互いが共に生きていく環境を目指して・・・。

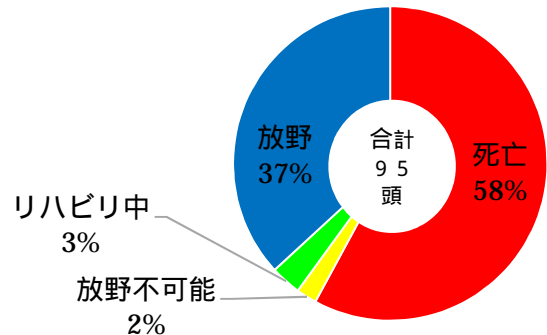


図1 過去10年間における交通事故で救護されたタヌキの転帰

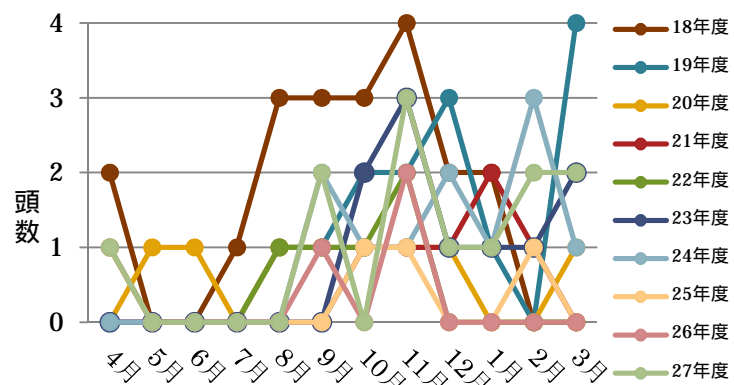


図2 交通事故による月別救護頭数



骨折部を治療して放野出来た個体
(1 6 0 0 0 9)
相模原市内にて保護

脊髄損傷による起立不能のため、
放野不可能な個体
(1 5 0 5 0 5)
相模原市内にて保護

参考文献：オオカミと仲間たち（P14～17）、
野生動物管理 理論と技術（P424,425）、
野生動物の交通事故対策（P88、89）

過去の救護実績は、ホームページの〔救護実績〕をご覧ください。